

# 気象災害であった可能性が高い1092年(寛治六年八月三日)の越後の大波

# 石辺 岳男(地震予知総合研究振興会)・五島 朋子(東京大学地震研究所)・中村 亮一(東京大学地震研究所)・室谷 智子(国立科学博物館)・片桐 昭彦(新潟大学人文社会科学系)・佐竹 健治(東京大学地震研究所・地震火山史料連携研究機構)

## §1. はじめに

史資料には、同時代に成立した一次史料から、明治時代以降に編纂された市町村誌に至るまで様々なものが存在する。二次あるいはより高次の史資料に記述された事象が必ずしも不正確なものとは限らないが、信頼性の低い史料にある記述は、時に誤った歴史地震像を導き出し、実際には存在しなかった地震(偽地震)を生み出しかねない(例えば、原田・他, 2017;地震第2輯)。また、これまで地震やそれに伴う諸現象(津波など)として考えられてきた事象が、史資料の再検討により台風や豪雨といった風水害であった可能性が示されたり(例えば、石橋・原田, 2017;地震第2輯)、別の地震を記述したものや日付が取り間違えられていることがある(例えば、加納, 2016;地震第2輯)。

## §2. 1092年(寛治六年八月三日)の越後の大波

『新収日本地震史料(第1巻)』(東京大学地震研究所, 1981;以降、『新収』)には、1092年(ユリウス暦:9月7日, グレゴリオ暦:9月13日)(寛治六年八月三日)に、越後で地震・津波が発生したとする史料が複数、掲載されている。また『日本被害地震総覧 599-2012』(宇佐美・他, 2013)では、「柏崎～岩船間の沿岸, 海府浦・親不知大津波におそわる。「地震」とある古記あるも、地震の状況を記した古記録未発見。疑わしい。」としている。この事象が地震津波災害であったのか否かは、当該地域における過去の災害履歴の解明ならびに将来のハザード評価において重要な課題である。そこで本研究では、この事象が地震津波であったのか否か史料学的検討を行い、大風(台風)であったと解釈する方が妥当であることを指摘する。

## §3. 1092年の事象に対する史料の検討

1092年の事象が地震津波であったとする史料として、『越後国式内神社考証』、『紫雲寺新田由来記』などが挙げられる。明治初期に編纂されたとみられる『越後国式内神社考証』には船江神社の項に「(前略)寛治年間, 地震大津浪ニテ, 寺泊辺ヨリ角田浜新潟辺マデスベテ変地セシ砌, 赤塚村民家モ, 当今ノ地ニ転居シテ, 船江神明ト民家ト遙ニ隔レル故, 居村ノ伊邪那岐社自然鎮守神ノ如クナリ(後略)」と寛治年間に地震大津浪があった事が記述されている。しかしながら詳細は不明であり、日付に関する記述もない。そのため、『越後国式内神社考証』における地震津浪が、1092年の事象を指している証拠はない。

『紫雲寺新田由来記』の附記には、「海蔵寺住職快秀附記して曰く 七十三代堀川院寛治六年戊辰年大津波大地震蒲原岩船陸地となる」と記されるが(大木『郷土史概論』,

1921), 日付に関する記述はない。また、寛治六年戊辰年とあるが、寛治六年の干支は壬申である。『紫雲寺新田由来記』の成立は享保十八年(1733)とされるが、その後書き継いだ写本も多く、上の附記は江戸時代後期に記された可能性がある。越後には文政十年(1827)以後、寛治三年(1060)の年紀のある古図『寛治図』の写本が多く作成されるが、史料としての信憑性は低い(堀『平安越後古図集成』, 2008)。『寛治図』には「寛治六年寺泊下ヨリ角田古潟砂山飛山榎島等大波ニテ打崩海トナル」と記される。これらの典拠を検討する必要がある。

『大日本史料』第3編2(東京帝国大学文学部史料編纂掛, 1927)には、寛治六年八月四日に諸国で大風洪水が発生したとし、『中右記』、『後二條師通記』、『扶桑略記』などの一次史料を載せている。同時代の日記史料である『中右記』の同年八月十五日条には、「去四日大風, 伊勢大神宮内外宮之雑舎多破損」, 同じく日記史料『後二條師通記』の同年八月十三日条には、「為大風, 伊勢大神宮寶殿被吹倒也, 國家大事也」と記されており、八月四日の大風により伊勢神宮で大きな被害があったとされる。また、ほぼ同時代に編纂された『扶桑略記』には、「寛治六年壬申(中略)八月三日甲寅, 大風, 諸國洪水。高潮之間, 民烟田島多以成海。百姓死亡, 不可稱計。伊勢太神宮寶殿一字, 并四面廊等, 皆為大風顛倒」とあり、寛治六年八月三日に大風(台風)が襲来して諸国で洪水や高潮が発生したとする記述が見られる。

寛治六年八月三日(あるいは四日)の事象が地震津波災害であったのであれば、何らかの震動(揺れ)や津波による被害に関する具体的な記述が残されて然るべきであるが、『中右記』、『後二條師通記』、『扶桑略記』などの史料には同日またはその前後に顕著な地震・津波が発生したとする記述は見当たらない。残存する史料に限られる時期に発生した事象ではあるものの、これらの史料の検討によれば、1092年に越後で発生したとされる事象は地震津波ではなく、むしろ伊勢神宮を始めとする諸国に被害を及ぼした大風(台風)による大波(高潮)であったと解釈する方が妥当である。

**謝辞:**本研究は、文部科学省による「日本海地震・津波調査プロジェクト」ならびに「地震調査研究推進本部の評価等支援事業」の一環として実施された。ここに記して感謝申し上げます。